



しあわせのたね



haru

たける君と、しんじ君と、ゆうき君は、とってもなかよしな小学3年生。

3人は、毎週300円ずつおこづかいをもらっていたので、毎週土曜日にはだがし屋さんに行って、そのお金でふくろがいっぱいになるくらいおかしを買いました。

チョコにアメ玉にきなこもち、くじ付きのグミやベビーコーラ。そしてそのおかしを持って公園に行って、元気いっぱい遊びました。遊びつかれたらおかしを食べてひと休み、そしておなかいっぱいになったら、また遊びました。

ある日たける君は、お母さんといっしょにまちへ買い物に行きました。

すると、まちの交差点こうさてんで黄色の服を着て大きな声でさけんでいる人たちがいました。

ぼきん
「募金をおねがいしまーす！」

たける君はお母さんに聞きました。

「ボキンで、何？」

お母さんは言いました。

「大事なことのために自分のお金を使ってもらうことよ。」

「ふうん。」

たける君は大事なことってなんだろうと思って、黄色い服を着ているお姉さんに聞いてみました。

「どうしてボキンをしているんですか？」

お姉さんは言いました。

「5才のかおりちゃんっていう女の子が重い病気になってね、アメリカでしゅじゅつ手術しないといけないの。」

でも、お金が足りなくて、アメリカにも行けないし、^{しゅじゅつ}手術 もできないの。

だから、その子のために^{ぼきん}募金をしているのよ。」

「ふうん...。」

たける君は、その女の子がアメリカに行って^{しゅじゅつ}手術 できるといいなと思いました。

それで、お母さんに言いました。

「お母さん、ぼく、ボキンがしたいから、今週のおこづかい100円ちょうだい。」

「ええ、いいわよ。」

お母さんはおさいふから100円取り出して、たける君にあげました。

そして、たける君はその100円をお姉さんが持っている箱に入れました。

お姉さんはいうれしそうに「ありがとう」と言ってくれました。

たける君とお母さんは、またまちを歩きました。

すると、こんどは青い服を着た人たちが何かさげんでいました。

^{ぼきん}「募金、おねがいします！」

たける君は、青い服を着たお兄さんに聞いてみました。

「どうしてボキンをしているんですか？」

「ぼくたちの中学サッカーチームが全国大会に行くんだけど、そのお金が足りないんだ。

^{ぼきん}それで募金をおねがいしているんだよ。」

たける君はサッカーが大好きで、自分の県のサッカーチームが全国優勝したらうれしいなと思いました。

それで、お母さんにまた100円をもらって、お兄さんの持っている箱に入れました。

お兄さんは「ありがとう」とうれしそうに言ってくれました。

買い物をすませて、お母さんと帰っていると、こんどはピンク色の服をきた人たちが何かさけんでいました。

ぼきん
「募金をおねがいしまーす！」

たける君は、ピンク色の服のおばさんに聞きました。

「どうしてボキンをしているんですか？」

「アフリカでたくさんの子供たちが病気になっているのよ。

ちょっとのお金で、その子たちにお薬を送ることができるの。」

たける君は「ふうん。」と言って、ぼきん募金箱にはりつけてある写真を見ました。やせ細った小さな子供が、悲しそうな大きな目でこちらを見て写真に写っていました。

たける君は、この子に元気になってほしいなと思いました。

それで、お母さんにまた100円をもらって、おばさんの持っている箱に入れました。

おばさんが「ありがとうね」とうれしそうに言ってくれました。

そして、気づきました。

「あ、お母さん、ぼく、おこづかい全部つかっちゃった。」

でもたける君は思いました。

「土曜日のおかしは買えないけど、でもいいや。ぼくはいつでもおかしが食べられるもの。

それに、100円ずつだけど、とってもいいことに使ってもらえる。

ぼくの300円、役に立つといいなあ。」

そんなたける君をお母さんはうれしそうに見ていました。

さて、その週の土曜日、たける君は、しんじ君とゆうき君といつものだがし屋さんに行きました。

でも、たける君はおこづかいを**ぼきん**募金に使ってしまったので、何も買えませんでした。

「おい、たける、どうしたんだ？ガチャガチャ、しないの？」

その日は、おかしをガマンして、今テレビで大人気のヒーローマンのガチャガチャをしようと3人で決めていたのです。

たける君は言いました。

「うん、ぼくは、ボキンに300円全部使っちゃったから、今日はもうおこづかいがないんだ。」

「ボキン？」

2人はふしぎそうに言いました。

「うん、大事なことのために自分のお金を使ってもらうことだよ。」

そして、たける君は3つの**ぼきん**募金のことを話しました。

「へえ！」

しんじ君が目をまんまるくしておどろきました。

するとゆうき君は言いました。

「今日は300円でヒーローマンのガチャガチャをしようって3人で言ったのになあ。」

「ぼくはいいよ。しんじ君とゆうき君は、ガチャガチャしなよ。」

「うん。たける、ごめんな。これ買うの先週から楽しみにしてたからさ。」

しんじ君はそう言って、300円をガチャガチャに入れてハンドルをぐるっとまわしました。

「あ！やったあ！これ、ほしかったんだ！」

次にゆうき君がガチャガチャをしました。

「わ、これ、ぼくがほしかったやつだ！」

ふたりは大よろこび。

そんなふたりを、たける君はうらやましそうにながめていました。

「まあ、いいや、ガチャガチャは来週でもできるし。」

次の土曜日、3人はまただがし屋さんに行きました。

ところが、ヒーローマンのガチャガチャは、もうなくなっていたのです。

だがし屋さんのおばちゃんと言いました。

「ごめんねえ。ヒーローマンはとっても人気があるから、きのうで全部なくなっちゃったんだよ。」

「え、そうなの？」

たける君は、とってもざんねんでした。

そして思いました。

「ボキン、しなければよかったなあ...。」

夕方、家に帰ると、中学サッカーの全国決勝がテレビで放送されていました。

たける君の県のチームは、決勝まで進んでいたのです。

たける君は

「がんばれ、がんばれー！！」

と、テレビの前でおうえんしました。

そして、試合は2対1で、勝ちました。

サッカーチームのお兄さんたちは、よろこびをばくはつさせていました。

たける君はそれを見て、

「やった、やったー！！ぼく、ボキンしてよかった！」

と大きな声で大よろこびしました。

そうして、半年たったころ、ばんごはんを食べながら、ニュースを見ていたら、アナウンサーの女の人がありました。

「重い病気でアメリカに行って しゅじゅつ手術をしたかおりちゃんが、しゅじゅつ手術を終えて、ぶじに日本に帰ってきました。」

たける君は、そのニュースを見て思い出しました。

「あ、ぼくがボキンした女の子だ！

しゅじゅつ
手術、せいこうしたんだね、よかったなあ。」

かおりちゃんが、お父さんとお母さんと手をつないで、ニコニコしながら歩いているすがたがニュースに出ていました。

そのえがおを見て、たける君は、本当にうれしい気持ちになりました。

たける君は、小学6年生になりました。

ある日の朝、たんにんの先生が言いました。

「みなさん、今日はなんと、アフリカからお友たちがたくさん来ています。」

すると、教室の入り口から、10人くらいの男の子と女の子が入ってきました。

みんなはびっくりしたけれど、はくしゅして10人をむかえました。

10人の中のひとりの男の子が、はずかしそうにほほえみながら、外国語で言いました。

「ぼくの家はとってもびんぼうです。小さいころ、病気になりました。もう助からないと、家族や友だちがみんななきました。でも、その時、ちゅうしゃをしてくれるお医者さんが来てくれました。ぼくはちゅうしゃをしてもらいました。そしたら、病気がよくなりました。日本の人たちがみんなでお金を出してくれて、ちゅうしゃができるようになったと聞きました。みなさん、本当にありがとうございました。」

たける君はそれを聞いて思い出しました。

「あ、ぼく、3年生のときにボキンした！

わあ、みんな元気になったんだなあ。すごいなあ。うれしいなあ。」

その日の昼休み、しんじ君とゆうき君が言いました。

「なあ、たける、お前3年生のときボキンしたって言ってたよな。

それでアフリカの人が元気になったんだね。すごいなあ。」

家に帰って、お母さんにそのことを話しました。

お母さんは、とってもうれしそうに言いました。

「そう、たける、みんなの役に立ってよかったわね。

少しずつだけれど、しあわせのたねを植えることができたのね。」

「しあわせのたね？」

「そうよ、人の役に立つって、すてきなことよ。

人も自分も幸せにしてくれるのよ。」

「そうかあ。しあわせのたねかあ。

ぼく、これからも、たくさんしあわせのたねをまきたいなあ。」

「そうね、しあわせのたねは^{ぼきん}募金だけじゃないわ。

みんなのえがおをさかせること、それは全部、しあわせのたねをまくことになるのよ。」

たける君は次の日から、さっそくしあわせのたねをまくことにしました。

トイレのスリッパをならべること。そうじの時間、いっしょうけんめい教室をきれいにすること。バスや電車に乗ったとき、おじいちゃんやおばあちゃんに席をゆずること。クラスで、ひとりできみしそうにしている子に話しかけて、いっしょに遊ぶこと。

たける君は、みんなのえがおをさかせるために、いろんなことにちょうせんしました。

それを見たしんじ君とゆうき君は言いました。

「たける、すごいなあ。たけるのまわりはいつもえがおでいっぱいだ。」

「うん、ぼくもとってもうれしいんだ。

みんながえがおになるために、いろんなことをしたいと思ってるんだよ。

みんなもうれしい、ぼくもうれしい。さいこうの気分だよ。」

それを聞いたしんじ君とゆうき君は言いました。

「よし、ぼくたちもしあわせのたねをいっぱいまいて、まわりをえがおでいっぱいにするぞー！」

それから、たける君としんじ君とゆうき君は、自分からすすんで、しあわせのたねをいっしょうけんめいまきました。

3人のまわりは、いつもえがおでいっぱいになりました。